

始原への回帰

井 本 英 一*

古代イスラエルの暦は太陽暦に調整された太陰暦であった。年初は2つあり、宗教暦では太陽暦の3～4月の候に始まる1月ニサン月から12月アダル月まで各月が30日と29日を交互にとった。この暦法は太陰暦法にのっとって、各月の14～15日にはいつも満月がくるようになっていた。各年は太陽暦との暦差11日が残るが、3年に1回13月ウェ・アダル月を閏月として置き、当時の技術で微調整していった。この暦法は、8年に3か月の閏を入れたり、19年に7か月の閏を入れるギリシアや中国の太陰太陽暦とは異なる。また太陰暦だけにのっとるイスラム暦とも異なる。イスラム暦には閏がないので、毎年11日短くなる。そこで1年の始まりは後退してゆき、9年で1シーズン年初が後退することになる。イスラエル暦にはいわゆる「ハレ」の暦である宗教暦のほかに「ケ」の暦である日常暦があった。この暦は1年の後半7月ティシュリ月を年初の1月とし、6月エルル月を12月とした。閏は12月エルル月のあとに置いた。

1年の初めは1月1日と考えるのが常識であるが、太陰暦の場合、1月14～15日の満月の日から始まったのではないかと考えられる。ユダヤ教徒が祝う1月14～15日の過越節から1週間、彼らはパン種を入れないマツォと呼ぶパンを食べる。パンには苦菜（にがな）が添えられる。さらに固いゆで卵、リンゴ、乾燥果実、甘いワインが食卓に置かれる。ユダヤ教徒自身の書いた

*元本学文学部

キーワード：過越節のパン、正月の粉食、米渡来以前の穀物、蛙の嗜食、神を食べる

書物は、一様にその理由を次のように書く。500年にわたってエジプトで奴隷として苦役に堪えた60万人のユダヤ人は、モーセに率いられてエジプトを脱出し、約束の地カナンに向かうことになる。ユダヤ人たちは、神ヤハウエとの約束どおり、家の入口に目印として子羊の血を塗っておいた。神は目印を見てそれらの家には危害を加えないで過ぎ越したので、この日を過越節というようになった。その直後、ユダヤ人は長い脱出行を始めたのである。事態が急であったため酵母を入れたパンの練り粉を前夜に用意しておくことができなかった。彼らは旅行の途次、水で捏ねた練り粉を太陽で焼けた石の間に挟んでパンを焼いた。これがマツォの起源である。つまり、パンを焼くひまがなかったからと説明する。苦菜は苦い苦難のシンボルであり、ゆで卵は固い団結を表わす。

リンゴ、乾果、ワインは苦菜とは対称的である。古くはマツォと苦菜だけを食したのであろう。酵母を入れないパンの起源について金関丈夫はいう。イスラエル人の神事にたね入れぬパンを用いたことは聖書にしばしば記されている。後世いろいろな解釈が付されている。われわれの心中に一抹の悪心がきざしたならば、それはパンの中に1つまみの酵母があってパン全体をふくらませるごとく、われわれの全心を悪でふくらませるという道徳的比喩から神はこれを忌む、というような解釈が一般的であるらしい。しかし神事に際しては、比較的後世に発生した日常の風習が避けられ、古風が採用されるのが世界の一般的現象であるので、たね入れぬパンのごときもこのような見方で解釈すべきである（『長屋大学』法政大学出版局、1980年、61頁）。21日までの1週間のある日、祭司が初穂を主に捧げる儀式を行う。初穂は5月に完熟する以前の麦の青い穂であろう。1週間の過越節のあと1週間ごとの6つの節会を修し、50日目にキリスト教でいうペンテコステ（ギリシア語で50番目の意）の祝いを終え収穫祭を終わる。因みにキリスト教では復活祭後の第7日曜日であるので時季的には殆ど同じといえる。

古代イランから現代イランにいたるまで、新年は3月20日の春分に行われた。正月は、時代と地域により10日つづいたり12日つづいたりした。古代イ

始原への回帰

ランのゾロアスター教の暦では、年末5日は閏であった。この5日間を新年の導入部と考えると、正月は15日あるいは17日つづくことになる。正月の最終日は日本の小正月と同じように、再生儀礼の完了の日として盛大に祝われた。それは4月の初旬に当たった。この日は冬至から数えておよそ100日目に当り、サダ祭として盛大に祝われた。サダというのは100日目の意味である。この日が、冬至から105日目の中国の寒食節に相当することは以前論じた。キリスト教の復活祭は、春分のあとにくる満月のあとの最初の日曜日というのが現在の計算法である。復活祭は移動暦で祝われることになるが、平均的には4月上旬になる。ペンテコステはキリスト教では聖霊降臨祭のことで、平均的には5月下旬にくる。復活祭を迎える前に四旬節がある。四旬節は日曜日を除いた40日間の物忌みの期間で、灰の水曜日から始まる。灰の水曜日までの3日間はカーニバルで、肉食（古くは死者の肉を食った）して騒ぐ。カーニバルの開始からペンテコステの終わりの聖霊降臨祭までの100日間がイランのサダ祭や中国の寒食節に対応するものであった。4月上旬の季節に相当する東アジアの節日は旧暦3月3日の桃の節句である。6世紀中国の宗懐『荆楚歳時記』（守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂、東洋文庫、1978年）によると、3月3日はお祓いの日で、水辺で曲水の宴を行った（113頁以下）。旧暦3月3日は4月上旬に当る。この日の行事には復活祭やイランの新年祭に見られる再生思想がつよく表わされていない。水辺におけるお祓いは、復活祭でかつては人々がドナウ川に飛び込んだように、再生儀礼直前の水の清めということだけはいえる。

過越節では酵母を入れないパンを食べてきた。このパンは始原の食物で、その起源について種々の説明が行われてきた。人びとは、ある習慣を説明するために、しばしば神話、伝説をつくり上げてきた。身辺の祭りや行事を例にとって見ても、同じ系列に分類される行事や慣習も、地域によってそれらの起源が異なることはしばしば経験するところである。種なしパンには苦菜が添えてあった。現在は大都市に居住するユダヤ教徒は、西洋わさびなどでこれに代える。古代西アジア・アフリカの苦菜がニューヨークやシカゴで手

に入るわけでもない。特定の草をこの日のために栽培するわけでもなさそうである。せんべいのようなマツォに味付けとしてわさびを塗って食べるのである。古代の苦菜は栽培された野菜や香草以前のあくのつよい野草であった。ユダヤ教の伝承をとり入れたと見られるキリスト教の行事では、復活祭の1週間前のシュロの日曜日や洗足の木曜日や緑の木曜日に、人びとは野原に出て7種類あるいは9種類の野草を摘む。これらの野草でサラダを調理したり、ほうれん草といっしょにスープをつくったりする（植田重雄『ヨーロッパ歳時記』岩波新書、1982年、115頁）。四旬節は物忌みの期間である。野に出るといのはあの世とこの世の境界の野に出ることで、そこで摘む野草はあの世から復活する直前の境界の野の草で、再生に關与する者にとっての始原の食物であった。苦菜はこれらの野草を指していたと思われ、特定の品種名ではない。

中国、朝鮮、日本では1月7日を人日といった。東アジアでは正月は15日あり、人日はその前半部の最後の日か、後半部の最初の日と見なされた。『荆楚歳時記』はいう。正月7日を人日となす。7種の菜をもって熱いスープをつくる。あやぎぬを切って人型にしたり、金箔で人型をつくり屏風に貼る（43頁）。また同じ個所に董勛とうくんの『問礼俗』を引用していう。正月1日を鶏となし、2日を犬となし、3日を羊となし、4日を豚となし、5日を牛となし、6日を馬となし、7日を人となし、曇りと晴れの具合を見てその年の豊凶を占う（43頁以下）。正月は前半の死の部分と後半の再生の部分に分けられる。死者の魂は正月の前半で、鶏・犬・羊・豚・牛・馬に次々に生まれ変わり、7日の人日に人間に生まれ変わる。仏教でいう輪廻転生の1つの表われである。これらの動物は祖先獣で、死者の魂はこれらの祖先獣の中を渡り巡って再び人間に生まれ変わるのである。つまり6日まではあの世であったのである。一方、正月7日に7種の草を摘む行事があった。東アジアの場合、地域的な差異はあったと思うが、正月7日の七草は春の七草であった。植物も動物と同じように人間の魂が死後に入る宿主であった。よく理解できる例を挙げてみよう。古代エジプトの即位式や結婚式などの通過儀礼におい

て、王は腰に動物の毛皮を巻き、頭上にコブラを載せる。式典の参列者は、それぞれ自分の祖先動物の面を被っている。鳥・犬・狼・河馬など多彩である。日本では紋付きを着て式典に参列する。日本の家紋はほとんどが植物である。復活祭の前に摘む7種あるいは9種の野草は、スープに入れる材料であるが、この野草を食することにより、死者の魂は転生して人間の姿をとったのであった。近年は復活祭前夜にヘースティ・プディングを食べる。それは牛乳を煮てその中にオートミールや小麦粉を入れてつくった即席の食べ物で、中国でいえば、寒食節の前夜の飴湯や大麦粥のようなものである。寒食節は字義どおり、熱を加えない冷いものを食べる境目の節日である。この節日に入る直前には熱いものを食べたのであろう。

エデンの園で、エバが蛇にそそのかされて口にした知恵の木に生った実は俗説としてリンゴであったとされる。西アジアのリンゴは日本で目にする改良されたヨーロッパ系の大型のものではなく、直径5センチばかりの酸味のつよい中国系の林檎に類するもので、古代人にとっての始原の食物であったらしい。荒俣宏『開化^{おつくに}異国助っ人奮戦記』(小学館, 1991年)にいう。日本には中国渡来の小さい林檎は知られていたが、西洋リンゴは明治初年に米人J. イングによって将来された。イングは米国インディアナ州からリンゴの苗をとり寄せ、津軽の地でこれを栽培した。その名もインドリンゴと呼ばれるようになった。津軽地方はリンゴの生産地として名声を馳せるにいたった。戦後、日本人の心を慰め、飢えをしのがせたのは並木路子の『リンゴの歌』や美空ひばりの『リンゴ追分』であった。終戦時、リンゴの栽培技術は、ほかの果実を問題にしないほど発達していたので、頼れるのはリンゴだけであった(188—200頁)。

終戦後数年間、都会に出て勉強に励む学生の空腹を満たしたのは郷里から送られてくるリンゴであった。原種のリンゴは太古の人びとの主食の1つであった。栗原雅直(1930年生まれ)によると、秋田の中学生であったころクラスメートと連れ立って、弘前の田舎にリンゴの買い出しに行った。当時、東北のリンゴはもっぱら紅玉であった。そのころインドリンゴという新種が

できたという。香気のあるリンゴはドイツの特産で、ゲーテと同時代のヘルダーは、ドイツ人はレバノンの杉、ギリシアのブドウ、ローマの月桂樹を求めようとすべきでなく、自国の聖なる森の野生のリンゴを味わうべきだといった。氏はモスクワでも土地のリンゴを食べたが、それはしなびた小さな果実だった（『朝日新聞』（夕）'96.3.2）。ゲルマン人の始原の食物はリンゴであった。ケルトの伝説によると、アイルランドの王子（コンラ）のもとに不死の国から1人の女神が訪れてきた。女神の臣民は塚の中に住んでいた。女神は王子を彼女の国に招いた。女神は去りしなに王子に1つのリンゴを手渡した。このリンゴは1か月間、いくら食べても減ることなく、彼を養った。女神は1か月してから王子を水晶の船に乗せ、女性ばかりが住む楽園に連れていった（J.ヘイスティングス『宗教・倫理百科事典』2. エディンバラ, 1909年, 689頁）。この記述では、リンゴは塚の中の女神の国の食物で、死者はそれを食べて永遠の生命を手に入れるとされる。この死者の楽園と女護の島の伝承がここでは混同している。ケルト民族の間でも、リンゴはあの世の食物であり始原の食物であった。森野聡子「ケルトの神話物語と〈森〉のトポス」はいう。ケルトの異界といえ、誰しも『コンラの冒険』や『ブランの航海』に描かれたリンゴのたわわになる常世の国を思い浮かべる。ケルト人にとっての異界の像は海のかなたの理想郷ではなく、目の前に広がる森的なもので、その中に散在する墳丘や塚であった。水野知昭「客人款待神としてのオージン」はいう。『ヴォルスンガ・サガ』第3章によるとオージンは裸足で斑の外套を着て麻のズボンをはき、つば広の帽子を被り、白髪で片目の老人の姿で現れる。オージンはヴォルスンガ家の王女とシゲイル王の婚礼の場に飾られたリンゴの木に剣を差し、この剣を幹から引き抜いた者が王になるといい残して去る。剣を抜いたのは、ヴォルスンガ家の王子シグムンドであった。シグムンドは苦難の末、塚石の下に埋められるがその剣で石を切り裂いて現れ、シゲイル王を殺して王位につく（『ユリイカ』1997年2月号, 青土社, 136, 141頁）。

リンゴは婚姻、再生の象徴であった。ギリシア神話のヘラクレスは人間で

始原への回帰

あったが神々と同じような永遠の生命を手に入れたいとアポロンに願った。アポロンはヘラクレスに12の功業を遂行すれば永遠の生命を与えようと約束した。ヘラクレスの12の功業の11番目のものはヘスペリスの園から黄金のリングをとってくることであった。このリングはゼウスとヘラが結婚したとき大地の女神ガイアが贈ったものであった。この神話では、リングは婚姻と再生に関連した食物であった。アタランテは求婚者を自分の前に走らせ、自分は武装してこれを追った。追いつかれた者の運命は死であった。多くの者が殺されたあと、メラニオンが彼女に恋し、アフロディテーにもらった黄金のリングをもって競走した。追われているとき、リングを投げた。アタランテはリングを拾い競走に敗れた。そこでメラニオンはアタランテを妻にした（ヘラクレス、アタランテの話はアポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、1953年にくわしい）。コーカサスのスヴァン族の伝承ではイエスの誕生は次のようになっている。神はリングに息を吹き込みそれを天使たちに渡した。マリアはちょうど泉で下着を洗っていた。天使ガブリエルはマリアにリングを投げた。マリアはリングをとって3度咬んで懐に入れた。ガブリエルはマリアに神の子を生むことになろうと告げた（大林太良編『世界の神話』NHKブックス、1976年、158頁）。ここには競走のモチーフはないが受胎告知がリングを投げてなされる。この伝承を見ると、リングが始原の食物であることが分かる。

イランの民話。王と王妃の間に子供ができなかった。あるとき1人の行者（ダルヴィーシュ）がやってきて王妃にリングを与え、それを2つに切って王といっしょに食べると子宝にめぐまれるだろうといった。そのとおりにすると、神は2人に子供をさずけてくれた（奥西峻介訳「イランの昔話」『世界口承文芸研究』4、大阪外国語大学口承文芸研究会、1983年、412—413頁。奥西峻介「喉につかえたリング」『説話・伝承学』2、説話・伝承学会、1993年、53—54頁）。イランの新年は3月20日の春分である。このおめでたい日に結婚式を挙げるとき（昔の帝王は新年に即位式を挙げた。日本の古代の伝承にもある）、花婿はリングとラクダの骨髄を食う。子供のない夫婦は、新

年にダルヴィーシュが用意した2つに割ったリンゴを食べる (B. ファレヴァシー『ファレヴァリーの世界』テヘラン, イラン皇紀2535年, <西暦1976年>, 47, 65頁)。年の変わり目である新年にリンゴを食うのは再生, 誕生のためであったことはいうまでもない。ゾロアスター教徒は現在でも祖先祭や新年祭ではウリを2つに割って供える。ウリ科の果実は始原の食物であると同時に中空の構造は母胎を象徴した。このことは以前論じた。リンゴは中空の構造をとらないが, 始原の食物であると同時に母胎を象徴したと考えられる。ヨーロッパのケルトの年の変わり目は11月1日の万聖節であった。10月31日の大晦日はハロウィーン (聖なる夕方) で, このとき年玉としてリンゴが贈られた (奥西「喉につかえたリンゴ」56頁)。ユダヤ教の過越節の食卓にリンゴが置かれる背景について論じた。なお, 現代のユダヤ教徒の間では, ティッシュリ月新年の大晦日の食事でリンゴを薄く切り蜜に浸して食べ新年の繁栄を祈願する (高橋正男「過越の祭」その二, 『古代オリエント』第37号, NHK学園, 1994年, 1頁)。年玉についてであるが, アル・ベールーニー『諸民族の暦法』によれば, 東イランの王は臣下に対して年玉としてミカンを与えた。朝鮮でも歳時記を見ると, 王は臣下にミカンの年玉を与えたことが書いてある。松前健は, 田道間守は天皇の病気治癒のための霊薬トキシクノカグノコノミを将来したが, それは通説のタチバナの実ではなくリンゴの実であったという。ヘラクレスが, 夜の娘ヘスペリスたちの園に生る黄金のリンゴをもってくることは上述したが, 松前はこの黄金のリンゴは太陽象徴であるという。田道間守の属する但馬の出石族は太陽神話と関係の深い家柄であった。この氏族はアメノヒボコを祖とする朝鮮の渡来族である。ある女が野で昼寝をしていると, 太陽の光が女の陰上をさしたため女は妊娠して赤玉を生んだ。赤玉の化身アカルヒメと結婚したのがアメノヒボコである。松前によると, 赤玉は太陽象徴で, 赤玉の化身を追って航海するアメノヒボコは, 日神に仕える司祭者で, 西欧神話の太陽英雄と似ているという (『松前健著作集』第11巻, おうふう, 1998年, 54—55頁。松前健『日本神話の新研究』桜楓社, 1960年。松前健『日本の神々』中公新書, 1974年, 138頁以下)。

始原への回帰

古代エジプトの王は、毎朝化粧室でその日の王権の繁栄を祈願する儀式を行った。それは即位式で、王は王冠の上から聖水を注がれ、幼童神ホルスと同体化するために香煙につつまれた。王はそのあとで炭酸ナトリウムの玉を咬んだ。これで再生が完了した。王は階段を上って大きな窓の所にゆき、王の衣冠を着ける前に水面から上ってくる天の父なる太陽を拝んだ (E.O. ジェイムズ『古代の神々』ロンドン、1960年、113頁)。エジプトのファラオが毎朝即位式をしたのは、古代の王たちの在位期間が1日であったことを物語っている。シュメル時代の王名表を見ると、同一の王が毎年別名で記録されている。古くはシュメル王は、その統治期間は1年で、期間の末期には殺されて新しい王に代わった時代があったが、王の世俗的政治力が増大した結果、毎年王名だけを変えて済ませるようになったのであろう。日本の天皇は、清涼殿の石灰壇の上で、毎朝賢所と伊勢神宮を遥拝した。この儀式はエジプトのファラオの行った儀式と同類と考えられる。ファラオは毎朝、オシリスの子ホルス、つまりゼウスの子アポロン、ゾロアスター教でいえば天神アフラ・マズダーとアナーヒター女神の子ミスラ、天神とマリアの子イエスとして生まれ変わったのである。それは大い^{おお}子であり天子であった。ファラオは最後にソーダの玉を咬んだ。近代の工業製品としてのソーダは純度が高く白色であるが、古代の天然ソーダは土色をしていた。アメノヒボコが手に入れた赤玉はこれに当るもので、松前の説によれば太陽女神であった。ユダヤ人は過越節で、アクのつよい苦菜を咬むが、ファラオがソーダを咬むのは同じ精神からであったようである。いずれの場合も再生儀礼の終わりに行う行事である。時代的にはエジプトの方がずっと古いので、ソーダ性のアクは別の起源をもつとも考えられるが、今のところこのアクは野菜のアクか生肉のアクが起源ではないかと私は思っている。

アフリカ南西部のアンゴラ (1975年、ポルトガルから独立) で19世紀に行われた王の即位式の記録は次のようになっている。即位式では王の他我とされる男を犠牲として殺した。王は座に穴の開いた椅子に座り、その後ろには王の正妻と多くのめかけたちが座った。犠牲が王の前に連れてこられるが、

背中を王に向けている。王は三日月形の刀で犠牲の背中を切り開き心臓を摘出してそれを咬む。そのあと唾を吐き、心臓を焼くように命ずる。側近たちは犠牲を支え、彼の血が王の胸や腹にかかるようにする。酋長たちは王の椅子の穴から滴り落ちる血を掌で掬い、自分たちの胸やひげに塗り、王さま万歳、王国万歳と叫ぶ。犠牲の皮が剥がれ肉が切り刻まれて牛、犬、鶏その他の動物の肉といっしょに料理される。料理はまず王に供され、そのあと酋長、側近たちに供される。最後に式の参加者に出される。この犠牲が殺されるまで受ける待遇は、王の身代わりとしてのそれである (J.G.フレイザー『金枝篇』III, 死にゆく神, ロンドン, 1911年, 57頁)。王が他我の心臓を咬みその肉を食べたのは、ユダヤ教の過越節で種なしのパンとリンゴを食べるのに相当する。パンはイエスの肉として伝承されたが、それは始原の食物であり自分を活性化する他我の肉であった。日本の正月の餅は丸いものであれ四角いものであれ各人の他我の心臓である。アンゴラ王は最初の即位式で他我を犠牲にしたばかりでなく、毎年同じ儀式を行って犠牲を殺していった。

中国には立春に大根を咬む行事があり咬春と呼ばれる。咬蘿蔔あるいは咬蘿蔔ともいう。蘿蔔や蘿蔔は外来語で、前3世紀以来の中期ペルシア語のラプーあるいはラプークを写したものである。現代ペルシア語ではラブーといい、直径15センチくらいの赤かぶらで、砂糖大根のことであるが、かぶらとは別科のものである。古代の博物誌では同一視された。ラテン語ラプム、英語レイプも同じ系統でかぶらを表わす。米麦や雑穀が主食になる前は、ウリ科の果実や大根やかぶらが人類の空腹を満たしてきたようである。始原の食物としてのウリ、西瓜、ヒョウタン、カボチャなどについては、かつて「ふくべの話」『輪廻の話』(法政大学出版局, 1989年)の中で論じた。かぶらは日本でも特徴のある作物であった。白石昭臣「西中国山地の麦作儀礼」(『えとのす』23, 新日本教育図書株式会社, 1984年)はいう。主として日本海沿岸には、麦を年初に栽培する輪作形態の存在やかぶらを主作物とする焼畑が広く分布する点などから、わが国の焼畑の1部には、対馬・朝鮮を経てたぶん南シベリアに連なる別系統の焼畑農業の影響のあることも否定でき

ないという佐々木高明の説を引用し、麦とかぶらがところによっては重要な食物であり、儀礼食としても欠かせぬものであったという。島根県出雲東部には大根に関する儀礼が残っている。それも元日ではなく、正月20日に大根ナマスを歳神に供える。別の地域では正月20日に麦飯と山盛りの大根ナマスを歳神に供える。麦飯だけを歳神に供える地域もある。正月19日と20日、麦ホメとナマスクラベを行う例もあり、麦と大根が結びついているのが目につく。麦ホメは多くの地域にわたって正月20日の行事になっていることは注目に値する。白石はこれらの事例を総括していう。麦ホメが15日の小正月でなく20日に行われたのは、麦が重要な食物ではあっても、粟など他の穀物に比べ、二次的な存在であったためであるとする。しかし対馬では麦の儀礼は15日に行っているので、欠かせぬ食物には違いなかったとする（44—52頁）。

日本の合理化された文化の区分にハレの文化とケの文化がある。ハレの文化は稲米文化で、ケの文化は雑穀文化であるとする。ハレの食物は米を素材としたもので、餅、飯、シトギ（米の粉でつくった餅）、焼き米、団子、酒といったようなもので、ケの食物は麦、ヒエ、アワのような米以外の雑穀からつくられたものである。この二分法は日本文化の発生を論じる場合、有益な仮説である（桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子『ハレ・ケ・ケガレ』青土社、1984年。坪井洋文『イモと日本人』未来社、1979年。坪井洋文『稲を選んだ日本人』未来社、1982年）。この区分は穀物栽培がもたらしたものであるが、この中でも稲の渡来がもっとも新しく、もっとも美味とされたので、それまで主食の座を占めていた雑穀を追い出してしまった。穀物以前からあったウリ科の果実や大根、かぶらの類は周縁部に押しやられたが、文化史的には重要な地位を占めている。

石川県輪島市には田の神祭りがある。12月5日に収穫期の稲田から田の神を迎え、翌年の2月9日に家から稲田に帰す祭りである。祭りは2つあるわけであるが、前者が重視される。田の神は2柱と信じられ、その供物には、魚を2匹腹合わせにしたハチメというものと大根が必ずある。台所の神棚の隣に種粃の入った俵を並べる。田の神を供えたあと家の主人夫婦が供物を

食べ、家中の者がこれを食べる。2月9日にも同じことが行われる（伊藤幹治『宴と日本文化』中公新書，1984年，77—78頁）。田の神に限らず神は1対，つまり死を象徴する神と再生を象徴する神からなる。祭りも2つある。供物は1対の魚と（1対の）大根からなる。この魚と大根は日本海文化の古層の主食であったもので，のちに麦，アワや米が添えられるようになる。魚と大根は始原の食物であり，神そのものを象徴した。家人も供物をいただく神人共食は，神は神の他我である魚と大根を食べ，家人も神の他我を食べて活力を身につける行為である。

プリニウス（23—79）の『博物誌』（II，中野定雄・中野里美・中野美代訳，雄山閣，1986）に大根についての記述がある。大根は腸の薬であり，その汁は横隔膜の病気に対する特效薬とされた。エジプトでは，死体を解剖したとき，心臓の内部を冒す病気に対して，大根が唯一の薬であることが発見された。大根が他の食物より尊重されていたといわれている。デルフォイのアポロン神殿には金でつくった大根，銀でつくったビート，鉛でつくったかぶらが供物として捧げられた。ギリシア人の著述家に大根について論じた本があるが，大根は歯をすり減らすので歯に悪いと考えられているが，冬の間は極めて価値のある食物と考えられた。大根は象牙を磨くために用いられた（19. 86—87）。エジプトでは大根が心臓の病気の特効薬であるとされた。これは，心臓が大根にとって代わられる段階での話であると考えられる。のちに心臓を咬むのと大根を咬むのが同一視されるようになったのであろう。ギリシアやトルコを旅行すると，紀元前5世紀に数次にわたって行われたペルシア戦争で，ギリシア軍がペルシア軍から分捕った銅剣，銅盾などの武器や金銀の祭器を溶かしてギリシアの記念物につくり代えた品々に出合う。アポロンはゼウスの子供で永遠の若さの象徴であるが，その神殿に金，銀，鉛でつくった大根やかぶらやビートが供えてあった。敵の器物からつくり直した祭器は非常な聖性をもっていたのである。

穀物を主食とする以前は，ウリ科の果実や大根やかぶらを主食としていた。狩猟に従事する人びとの主食は肉と肉汁で，穀物が入手できる新しい段階に

始原への回帰

入っても、雑穀や米は従の位置にあった。原種に近い果実の採集民たちの蛋白源は魚や虫や小型動物であった。文明化したあとの祭りにおいてはこれらの始原の食物が食べられた。『日本書紀』にいう。応神天皇19年10月1日、天皇の吉野宮への行幸があった。国樫人が醴酒くずびとこざけ（甘酒のようなもの）を天皇に奉り歌を詠んだ。歌が終わると国樫は古風にのっとり口を打って笑った。彼らは山の本の実を常食とし、ひきがえるを煮て上等の食物とする。名づけてモミといている。国樫の土地は京から遠くはないが、山が峻しく谷が深く道が狭かったので朝廷に参上することは希であったが、これ以後はしばしばやってきて栗・茸・鮎の類の産物を奉った。これが吉野の先住民族と考えられる国樫の記録である。国樫人は地のはてに住むといわれるひきがえるや栗・茸・鮎を食べて生きていた。10月1日に天皇の行幸があったが、旧暦10月1日や太陽暦11月1日は、正月1日とは別の年の変わり目であった。この日は立冬前後の古い節日であった。国樫はこの日、ことさら、ひきがえるを煮た上味の料理を用意した。古語でこの料理あるいは上味のことを「もみ」というとある。現代に伝わる「もみない」という語は、語史的には近世までしかさかのほらないが、国樫のことばに起源があると考えられる。この上味の料理は天皇にも奉った。ひきがえるは、他の民族が新年に食べた野生動物の肉や心臓と同じもので、国樫が自分たちの先祖と信じていた生き物であった。国樫は五穀を知らなかったようなので、ひきがえるや栗などは始原の食物であった。

吉野の蔵王堂に伝わる蛙飛びの行事は、現在は7月7日の七夕の日に行われるが、かつては旧暦6月9日に行われた。この日は夏至のあとの三伏の候の1日で、暑い日である。国樫の10月1日とは季節的には異なる。1人の若者が扮する青蛙がみこしに乗せられて町内を巡る。途中で休憩する場所があり、人びとはこの青蛙の大きく開いた口の中に自分の頭を入れて咬んでもらう。蔵王堂についた青蛙は、前庭に伸びた長い板橋の上を飛びながら堂に向かってゆき、堂に入ると導師の授戒により人間として生まれ変わる。蔵王堂の行事は仏教行事であるので蛙（ここではひきがえるではない）を食べる場

面はない。しかし、蛙が祖先であるという伝承は生きている。正月にこの世を訪れる獅子舞いの獅子の口に小児の頭を入れて咬んでもらうように、青蛙にも咬んでもらう。獅子が祖先獣であるのと同じように、蛙も祖先なのである。蔵王堂の行事では、長い板橋を渡って祖先が人間に生まれ変わる。蔵王堂では、この行事を説明するために伝説を伝えてきているが、蛙の本質は『万葉集』で山上憶良が地上の果てを谷蟆（がまがえる）のさ渡る極み…（万800）と詠んだように（中西進『谷蟆考』小沢書店，1982年9頁）、あの世の生き物であり、トーテムである。蔵王堂の行事は現在は7月7日に行われる。7月7日は七夕で7月15日（現在の8月15日のお盆の日）の導入の日である。さらに7月7日は正月7日の人日と対になる死と再生の儀礼の日である。蛙飛び行事の終わりごろ、盛んに火を焚くが、食物を焼くことはない。

蛙を自分たちの祖先あるいは神として信仰する民族がいる。中国の雲南省に住むナシ（納西）族がそれで、女性は晴れ着として背中に羊の毛皮の肩掛けを背負う。年配の女性の毛皮は本物であるが、若い娘のそれは軽い人造品である。四角い羊の毛皮の上下左右に布帯がついていて、胸の前で斜め十字に結んで襷がけにしている。毛皮の上部は黒、下部は白である。私を案内したナシ族のガイドは、これは蛙を表わすといった。同じナシ族でも白の部分に羊の頭蓋骨を描いたものを見る。ガイドの説明では、蛙も羊も彼らの祖先神である。雲南省の麗江には羊の放牧は見られない。ガイドの説明によると、ナシ族はかつては遊牧生活をしてきたが、北方の乾燥地帯から四川省を経て雲南省にやってきたらしい。羊肉は高価で祭りの日にしか口にしない。羊はトーテムであるので、神を食べる日に食べるのである。問題は蛙である。蛙は2月4日と10月10日に食べる。2月4日は立春の日で、旧暦の正月は立春前後を起点とするので、年の変わり目である。10月10日は太陽暦では中華民国の双十節で建国の日であった。この日に清王朝が倒れたというのではなく、この日が古来お目出度い日であったので孫文が建国の日としたと考えられる。1949年10月1日、毛沢東の下に中華人民共和国が成立した。太陽暦の10月1日も10月10日と同じようなお目出度い日とされたのであろう。あるいは、旧

始原への回帰

曆の10月1日や10月10日が良い日であったので、新曆で同じ月日に読み替えたのかも知れない。10月10日の双十節は、中華民国の建国記念日であるが、ナシ族は1911年の建国以前からこの日を祝っていたので、1949年の革命以後も日付を変えることはなかったであろう。ナシ族は2月4日、乾し魚を用意し、蛙を食べる。蛙が多産であるのでそれにあやかるためだとされる。10月10日にも同じ食物を摂る。応神天皇19年10月1日（旧曆）、吉野の国櫛を訪れた天皇に彼らは蛙の料理を奉った。服属儀礼は年の変わり目に行われた。緑の発芽が遅れる北部欧州のケルト人は5月1日のメーデーと11月1日の万聖節を年の変わり目とした。その前の段階には4月1日と10月1日の文化があったであろう。古代ペルシアの曆では10月は狼月といった。人びとはこの月の何日かは狼の皮を被りトーテムの世界に入った。狼の皮を脱ぐことで人間として再生した。ヘロドトスは、イラン人の1派であるネウロイ人の狼変身について書き残している（『歴史』4. 105）。出雲に神々が集合する^{かな}神無^{づき}月も同類の月である。

蛙の嗜食は雲南省のナシ族に限ったことではない。W.エバーハルト『古代中国の地方文化』（白鳥芳郎監訳、六興出版、1987年）にいう。蛙は華南で広く食べられる。5月5日に蛙のスープが飲まれた。前漢の建国に尽した功臣^{しょうか}蕭何を祀る蕭何廟では、神格化されたこの將軍はしばしば蛙の姿で表わされる。がまがえるは人を不死身にする（180—182頁）。エバーハルトは『淮南子』「説林訓」にある鼓造というのは、ふくろうかがまがえるで、5月5日に厄除けとしてそのスープを飲んだという。旧曆5月5日の節句ごろは蛙の産卵期であるので蛙の性的な力を身につけるためだとする。エバーハルトはトーテムや神を食べるといふ觀念には達していないが、結論は同じである。前漢の高祖に建国させた蕭何は蛙の姿で表わされた。蕭何は高祖のアルテル・エゴつまり祖先霊として高祖を助けた。高祖のトーテムである蛙が人間の姿として出現し、高祖に漢を建国させたと信じられるようになったのであろう。著者はさらに、朝鮮文化領域内の満州の扶余の伝承に、子のない扶余王が供犠した結果、蛙の姿をした金色の子を見つけ、自分の子としたと

いう金蛙伝説を挙げている。これは王国がトーテムから始まるという伝承の1つの変異形である。

東南アジアの諸部族の村落の入口には2本の柱が立っている。柱の間には横木が渡され、横木の上に数羽の鳥が止っているのが見られる。この柱は、内と外を区切る門の門柱で、日本の聖域と俗界の境界に立つ鳥居と同じものである。鳥居の2本の柱には^お男柱と^め女柱の区別があり、男柱の方がやや太い。東南アジアの村の入口の柱や日本の鳥居を見ても、2本の柱がトーテムポールであるとは考えつかない。ナシ族の村の入口にも2本の柱が立っている。柱の高さは4～5メートルあり、柱頭部と約0.8メートル下から2本の綱が渡してある。2本の綱は、鳥居の笠木と^{ぬき}貫に相当する。横に渡された2本の綱の中央に50センチ×80センチの板が宙に浮いている。鳥居の^{がくづか}額束に相当する。ナシ族の柱にも男柱と女柱の別がある。男柱には9つの大きい∠型の切り込みがあり、女柱には7つの切り込みがある。ナシ族のガイドは、これらの切り込みは、9人の男の祖先と7人の女の祖先であると説明した。男柱の柱頭には亀頭を表わす半球がつき、女柱の柱頭には陰唇を表わす2枚の蝶の羽のようなものがついている。これらの祖先はただの切り込みで、蛙や羊の形は見られない。しかし明らかにそれはトーテムポールである。男柱では9つのトーテムが^{りんねてんしょう}輪廻転生して人間に再生し、女柱では7つのトーテムが順々に輪廻転生する。男柱も女柱も単なる柱ではなく、天と地をつなぐ梯子でもある。∠型の切り込みは足を入れる足掛かりで、ふつう見られる横木を渡した梯子よりは古い型である。『旧約聖書』「創世記」に出てくるヤコブが夢に見た梯子はこの種のものであった。ヤコブは夢の中で、天使たちがこの天梯を伝って天と地の間を上ったり下りたりするのを見た。ヤコブは翌朝、目が醒めてから枕にしていた石の柱を立て油を注いで聖別し、神の家を建てた(28.10-19)。村落や家屋あるいは墓地の入口に立つトーテムポールは天地をつなぐ梯子である。

私は1997年、中国西安で三伏の候に健康に良いというので誘われて専門店で犬肉を食べたことがある。中国では犬肉を食べることにはタブーがある。

苗族の間では外来の客に飼い犬を殺してもてなすことがある。湖南の土家族は家のかまどで煮ることと神の供物にすることを忌むが犬肉を食べる。仲間で鍋を囲んで食べる時、食器を使ったり食卓で食べるのではなく、地べたに座って食べるならわしである（鈴木健之「狗肉は正席に上らず」(六)『中国民話の会通信』38, 中国民話の会, 1995年, 6頁)。中国のイスラム教徒も西アジアのイスラム教徒と同じように犬肉は食べない。犬や狼や猛禽類は死体の肉を食うので非常なタブーがある。犬や鳥の体内には祖先の靈魂が宿っているために忌むようになったのであろう。一方では祖先=神を食べる觀念が強い社会では一定のときに犬肉を食った。家のかまどで煮ないとか神の供物にしないというタブーは、かつては犬肉が神饌であったことを物語る。地べたで犬肉を食べるのは、犬肉が始原の食物であったことを物語り、自然の天井の下で食器なしで食べたことは、始原の神祭りと神人共食を物語る。

諏訪大社上社の正月1日の行事に蛙狩かわずかりの神事がある。上社本宮前を流れる御手洗川の氷を割って蛙（ひきがえる）2匹をとり、これを神前において小型の矢に射したままいけにえとして捧げる。そのあと包丁を入れて半分はおお大祝ほふりに進め、人びとは神人共食した。従来この儀式についてはいろいろ論じられてきた。

- (1) 食料として神に奉る儀式
- (2) 害虫として蛙を射止める儀式
- (3) 狩猟または農事の豊穰を祈願する儀式
- (4) 御狩初めの式を表わしたもの
- (5) 諏訪神の龍（蛇）神信仰に起因していけにえとして捧げる儀式

の5つの解釈があるようである。（三輪磐根『諏訪大社』学生社, 1978年, 90—92頁）。蛙ことにひきがえるは、神社がこの地に安定するまで人びとが始原の食物としてきたものであった。諏訪大社に蛇や鹿の神信仰が行われるようになるのは後の段階であった。この儀式では始原の食物である蛙は神自身であり、儀式のあと大祝らは直会で神を食べるのである。2匹の蛙は生と死を象徴するもので、田の神への供物である2匹の魚と同じである。国樞が10

月1日に応神天皇に奉ったひきがえるを煮た料理と同じものである。諏訪大社の供物は生まのままであったが、直会に出されるものは焼いてあった。

矢野憲一「神々の食卓」(『i s』) 28, ポーラ文化研究所, 1985年)にいう。神饌には生饌せいせんと熟饌じゆくせんの2つがある。生饌は生まのもので、通常これがいちばん多い。熟饌は火を加えたものであるが、古代人の食物は生まが多かった。味付けは殆どなされない。塩と醬を別にお供えしてあるものもある。伊勢神宮の最大の祭りである神嘗祭の由貴ゆきの大御饌みけは30品目を越す。鮎あわび, 鯛, 鰻えび, 飯, 餅, 乾鰹, 香魚, 乾鮫, 乾キス, 鯉, 野鳥, 水鳥, 昆布, 大根, 牛蒡などと共に塩と水が供えられた。神宮では素焼きのかわらけに木の葉を敷き品をのせ案という机の上に並べた。神饌の代表は鮎で、生まのもの、乾したものの他に2種類の加工したのしあわびがあった。加工はしても味付けはしない。由貴の大御饌は、年3度の^{大祭}で午後10時と午前2時の深夜、深い闇の中に庭火がちろちろと燃える神楽歌が流れる中で供される。直会はナホリアヒで、本居宣長は解斎の意だと解釈したが、おさがりを頂戴するばかりでなく、古くは祭りの初めにも、祭りの中でも直会が行われていたらしい(30—32頁。他に畿内44社の神饌を原色写真を付けて解説した岩井宏実編『神饌』同朋舎, 1981年がある。)。神饌にはいかに海産物が多いか驚かされる。穀物は雑穀は見られずハレの文化の米が用いられる。大御饌と共に4種の神酒である白酒, 黒酒, 醴酒, 清酒が供えられる。稲米文化には高い文明度が見られ、これに限っていえば必ずしも始原の状態とはいえない。これらの神饌は木の葉を敷いたかわらけの上に置かれる。日本の墓は、本体の前に家紋を彫った祭壇が安置してある。この祭壇の上面には矩形の凹みが彫ってある。祭儀のとき、この凹みに水を入れ、水面に木の葉を浮かべる。古くは祭壇上の凹みに供物を載せたが、供物は凹みに敷いた木の葉の上に載せたのである。

北野晃「蛙神の誕生」(『東アジアの古代文化』107号, 大和書房, 2001年)は、日本の蛙神のさまざまな姿, 山民の蛙食のことなど興味深い事例を多く挙げる。その中で今日でも吉野町の浄見原神社きよみはらの国樺奏の神饌には蛙がある。

始原への回帰

秋に捕えた赤蛙を祭りの役の者が家の中の土中に埋めておき、旧正月の14日の祭りの日に掘り出して生きたままを供えるという（128頁）。蔵王堂の蛙飛び行事は現在は正月7日の対の日である7月7日に行われる。正月後半部の再生儀礼は7日から14日までで、14日が完了日である。浄見原神社では、蛙は14日に出てくる。中国広西省の村々には、旧正月元旦に幼年男女が盛装して水田に出かけ、蛙をとってくる。発見者は蛙婆郎といい、向こう1年間、幸運であるとする。蛙は殺して竹筒に入れ、子供たちが担いで村中をまわる。各戸は米の団子を贈る。蛙婆に供えたあと、一同で団子を食べる。この月の終わりの夜、去年埋めておいた蛙を掘り出し、骨の色で豊凶を占うと、本年の蛙を埋めた。これらの行事の意味について、白川静『中国の神話』84頁や三品彰英「銅鐸小考」を引く（130頁）。浄見原神社の旧正月の14日の祭りは再生儀礼の完了の日であるので、この日、土の中から掘り出して神饌にする蛙は、神そのものである。中国広西省では、蛙は元旦に殺し村中をまわる。蛙は祖先神で村人の他我である。蛙の死体は村中の人に活力を与える。月の終わりに掘り出す蛙は、おそらくは去年の正月14日に殺した蛙であろう。今年殺して竹筒に入れて持って歩いた蛙は、肉を食べてから骨は埋め、来年の占いに供したのである。

イラン人の正月料理には乾し魚が必ずつく。日本人の正月料理は、ごまめや棒だらを用いたものがつく。伊勢神宮の新嘗祭の神饌には、生鮮な魚の他に乾した魚介類がある。乾し魚は始原の食物であつたに違いない。民族がある地点に定着するまでは移動しなければならない。生きた罐づめといわれる羊を連れた遊牧民は、間引いた羊を処理して食料にすることができる。遊牧以前の生活はどのようにしていたのであろうか。米食段階に入った文化は、乾した飯であるほしいい（糲）を水に浸してもどし口にした。昔の旅人はほしいいを携行した。穀物以前には何をもち歩いたのであろうか。考えられるのは、乾し肉や乾燥果実あるいは乾し魚である。乾し魚の種類が川魚であるか海魚であるかによってその民族の出自を語ることはできない。日本の正月料理に使うごまめと棒だらから日本人の出自は断定できない。しかし魚は始

原の食物には違いない。前述した2柱の田の神の供物は2匹の魚と大根であった。魚も大根も始原の食物であると同時に、子孫の生命をつないでくれる祖先であった。

永遠の生命を求めたアレクサンダー大王は、緑の人ヒズルの案内で川の水源にある洞穴に入ってゆく。2人はそろって奥に進んでゆくが、途中で水路（水脈）は2つに枝分かれする。アレクサンダーはヒズルを見失い、死の水の湧き出る起点に到着する。彼は死の水とは知らず、それを飲み体に浴びる。ヒズルは生命の水の起点に到着する。彼は腰につけた乾し魚を水に浸して食べようとする。乾し魚はふやけるのではなく、生き返って水の中をすいすいと泳いで逃げてしまう。アレクサンダー大王は、途中でヒズルに出会う。自分が死の水を飲んだことを知った大王は、人間は死すべき存在であると悟り、泣きながら洞穴を出る。アレクサンダーが生命の水を求めて地下の水脈をたどる物語は、ミニアチュールの恰好の題材になっている。ヒズルが袋に入れて腰に携行する乾し魚は、古代の旅する人の姿である。アレクサンダーも同じような出で立ちであったと思うが、物語にはその光景はない。

イスラム教では、イスラム暦9月が断食の月である。この月はマラダン月といわれ、日の出から日没までいっさいの飲食が禁じられる。日没は号砲その他の合図で知らされる。夜は飲食は自由であるので、人びとは腹いっぱい食べて明日の断食にそなえる。統計によると、この月に消費される小麦粉、砂糖、茶、油、肉類は、他の月の消費料の4倍になる品目がある。ラマダン月のあとにシャッワル月がつづく。断食月のラマダン月が終わると、シャッワル月1日から3日まで断食明けの祭りがある。この祭りでは魚が用意される。新聞の報道によると、カイロでは市場が買い物客でごった返す。市場にはリングというにしんのくん製が山積みになれ、人びとはこれを買求める。ラマダン月の毎夜、肉をたらふく食った胃に魚がよいというので、断食明けの初日には必ず食べることになっている。もちろん、肉屋では羊肉や牛肉も飛ぶように売れ、店主にとっては1年のうち、いちばんの稼ぎどきになる（『毎日新聞』'98.2.11）。断食明けの祭りはイスラムの2大祭の1つで、も

始原への回帰

う1つの大祭は、12月のメッカ巡礼の最後の4日間行われる犠牲祭である。犠牲祭で乾し魚を食べる習慣があることは聞かないが、断食明けの祭りではしんの乾し魚を食べる。種類はにしんであるが、アレクサンダー物語のヒズルが腰に携えていた魚と同類の始原の魚であった。

イランの場合も同じで、こちらではまず新年の食卓に調理しない乾し魚が供えられる。テヘランに居住するゾロアスター教徒の食卓にも乾し魚が用意される。日頃、羊肉を嗜食するイスラム教徒のイラン人も、元日は乾し魚やカスピ海のちょうぎめの白身の照り焼きを食べる。国々でこれらの習慣の起源と意味をそれぞれ解説するが、始原の食物であった。イランの断食明けの祭りもまず乾し魚を食べる。ラマダン月は毎夜羊肉を食べるので、魚を食べるのは気分的には口直しになる。市民は北郊シェミランに車を飛ばし、この祭りのための鱒の炭焼きに舌つづみを打ち帰宅する。

中国の地方文化にも魚を始原の食物とする名残りが見られる。萩原秀三郎「楚文化と倭国」(『自然と文化』24, 日本ナショナルトラスト, 1989年)は『巫風と神話』(楚風編集部編著, 湖南文芸出版社, 1988年, 倉田こずえ抄訳)を引用して次のようにいう。楚・越の地は米を食べ魚をあつものにしてきたが(『史記』), 漢代の『風俗通義』には呉・楚の人は魚塩を嗜み, 禽獣の肉を重んぜず, とあり, 唐代の杜甫も湖南に生活し, 「歳晏行」の中で, 楚人は魚を重んじ, 鳥を重んぜず, といっている。また湖南人は魚を以て祖先を祀り(『国語』「楚語」), 魚がなければ宴会とは見なさなかった。今日でも楚国の先住民と考えられている苗族や侗族は, 田圃で鯉や鮒を養い, 苗寨, 侗郷(寨, 郷は村の意)では, 家の壁に魚の尾緒を貼りつけ, 余裕のある家であることを誇示する。湖南省の靖県や通道県にいる侗族は, 祖先を祭るとき, 鶏の代わりに卵を, 肉の代わりに豆腐を用いることはあっても, 魚を欠くことは許されない。魚を欠くことは最大の不敬にあたり, 7月15日の孟蘭^{ユラン}会^{フエ}をすら音をもじって魚娘会^{ユニャンフエ}と呼ぶ。前掲書『巫風と神話』にある魚娘会などは, 日本の盆魚の習俗を彷彿とさせる(45—46頁)。

楚の住民あるいはその地域の先住民は魚を始原の食物としていた。米が主

食になった時代の記録が引用されているが、鳥獣の肉類よりは魚介類を重んじたことが分かる。もっと重要な点は、楚人が祖先を祭るとき、魚を用いることである。魚が彼らの祖先とされた時代があったことを物語っている。魚がトーテムとされたのである。現代でも、うなぎをトーテムとする人びとがいる。この場合、うなぎを食べることに嫌悪感を示す。トーテムを食べることは祖先、つまり神を食べることで、それは神を活性化させ、人間をも活性化させることであった。豚や犬をトーテムとして食う習慣がなくなると、これらの動物が不浄と見なされるのと同じように、トーテムとしてのうなぎもただ屍肉を食う不浄動物と見なされるようになった。祖先を祭るときに魚を用いた文化には、このような歴史があった。宴会というのは、古代では神との共食であったので、神も人も祖先である魚を食べることによって会を終えたのである。苗族や侗族の家の壁に魚の鱗が貼ってあるのは、その家の富裕さを表わすという。これは本来は祖先である魚を入口の土壁に埋め込み、尾鱗を外に出した習俗の名残りであろう。他の文化では野生動物あるいは家畜の角を入口の壁に埋め込んである。動物の頭蓋骨といっしょの場合もある。これらの角は装飾でもないし、富の誇示でもなかった。本来は入口で祭られた祖先（獣）の象徴であった。いわゆる首狩り族が収穫した他部族あるいは訪問者、外来者の頭蓋骨を住居の入口の棚に安置するのは、異境からの客人や異界の人間の首の霊力を入口に祭ることなのである。動物の角や人間の頭蓋骨は外部から向けられる邪視を追い払ったり、災厄の侵入を阻止するためと考えられるようになる。魚をトーテムとする人びとは魚の尾鱗を埋め込むのである。キリスト教が4世紀にローマの国教と認められるまで、キリスト教徒は地下の洞窟で生活することを強いられた。これらの洞窟の入口のつきあたりの壁には魚の絵が描かれてあった。キリスト教徒はコイナー・ギリシア語を使っていたが、魚のことをギリシア語ではイクテュースといった。ローマ字に直すと I X T h Y S となる。それはイエス (I) キリスト (X) 神の (T h) 息子 (Y) 救世主 (S) の頭文字であるが、偶然に語呂が合ったと考えられる。本来はこの世とあの世の境界で祭ったトーテムであった。

1978年、鳥取県岡益で発掘された梶山古墳には魚の彩色画があるので当時新聞紙上でしきりに論じられた。玄室の奥壁上部に描かれたづんぐりとした鮭と思われる魚とその上部に1列に描かれたベンガラによる三角、同心円、同心円、三角の4つの文様がよく残っていた。2つの同心円の間には空間があり、そこにはうなぎ（現代人の目にはそう映る）が1匹描かれる。三角文を鱗と見るとうなぎではなく蛇になる。同心円は靈魂を表わしたと考えられる。2つあるのは生と死の靈魂を象徴している。三角文は生と死を象徴する心臓などの内臓であるかも知れない。玄室はこの世とあの世の境界で、その奥壁に描かれた魚は本来は祖先を表わす像であった。50センチ以上あるこの魚と20センチほどのうなぎはそれぞれ1匹ずつである。森浩一は、鮭が産卵のために元の川に回帰する習性をもっていることから、再生を表わすとする。日本海側は新羅と対しているので、7世紀の新羅文化の影響を受けた可能性がある。岡益には他に信仰対象になっている石の壇がある。他の地方には見られない形式のものである。現代の韓国文化は肉食を主とし魚食をとらないが、古代はそうではなかった。このことは別に論じる。大阪府柏原市の高井田横穴古墳群のうちの1つの横穴古墳の線刻画の中に魚の画がある。魚は2匹で背鰭が印象的に描かれる。岡益の魚の背鰭も色彩的に人の目を引く。高井田の魚は2匹で、生と死を象徴する。円文が1つ見られるが、これもある点で岡益に通ずる。魚の線刻画としては、福岡県穴ヶ葉山古墳や鳥取県サギ山古墳にも見られるが、いずれも背鰭が強調されている（尾鰭はもちろんである）。魚形は護符の意味があり、慶州天馬塚出土の腰佩にも魚形が施されている。魚符はスキタイ文化にもゲルマン文化にも見られ、生者の再生、死者の再生のための護符であった（和光大学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』1978年、22—23頁）。祖先の魚が子孫を守る思想がユーラシアの文化に見られるのである。魚の尾鰭を境界である入口の壁に貼る（埋める）のも、富の誇示だけでなく、もとは祖先に家を守ってもらおうとする呪術であった。横穴墓の玄室の奥は、地脈の最奥部である。地下水が沸き出して外部に流れ出る。墓から流れ出る水は生命の水で、その始発点に魚がいることになる。

アレクサンダー物語の精霊ヒズルが生命の水の水源に到達したとき、乾し魚が再生して泳ぎ去った。これは地脈・水脈の始発点にいる祖先の姿である。

雑煮は正月の食物である。それでも、正月に食べない風習もある。雑煮はふだんの食卓に上せられることはない。その1つ1つの材料である餅、野菜、鶏肉、魚のすり身（かまぼこ）、調味料の味噌、醤油などはふだんの食卓で見られるものであるが、雑煮としてうるし塗りの容器に入れて出されるといわゆるハレの食物となる。七種粥の場合も同じである。これらの正月の食物は始原の食物を美しく調理したものである。採集生活をしてきた時代の食物に回帰するのがその目的である。主として正月前半にいただくおせち料理は、あの世の料理で、それを食べることによって祖先の世界の力を身体に摂取することになることは別に論じたことがある。おせち料理もうるし塗りの重箱に入れてあり、その1つ1つの材料は日常の調理でも用いる。雑煮の場合もそうであるが、1つ1つの素材は生命を維持する根源で、大昔にはそれらが祖先＝神そのものと見なされたのである。正月の飯で特徴のあるのは赤米飯あるいは小豆飯のおこわである。いずれも赤米あるいは白米（もち米であれ、うるち米であれ）を材料とするので、始原の食物とするには、新しい食材である。赤米の方が白米より古いので、赤飯はその名残りであるとする柳田国男説には反対の説もある。桜井徳太郎他、上掲書にいう。天皇が大嘗祭で食べていたのは白い米なのか赤い米なのか分からない。しかし、「尾張国正税帳」には多量の赤米を送った記録がある。その赤米は酒の原料になっており、大嘗祭の天皇の食料になったとは必ずしもいえない（216—217頁）。米以前の雑穀文化の時代はどのようなようであったか考えてみなければならない。

始原の食物である雑煮に入れる餅は、すでに雑穀文化を脱した時代の産物である。あの丸い形は祖先獣の内臓、ことに心臓と考えられることは先述した。しかし、これらの餅は小豆を使って赤くもしてないし、赤米の餅があったとも聞かない。狩猟民であったアイヌは雑穀は知っていたが、米と豆類を交換するようになるのは、和人が蝦夷地に入ってきてからである。現在は、狩猟民であるアイヌには鹿や鮭のような鳥獣を自分用に狩猟する自由もない

始原への回帰

が、いわゆるハレの食物として客に出される肉汁には、合法的に狩猟した鹿肉が主になり、ヒエ、アワなどの雑穀の粉でつくった団子が入っている。団子は肉汁や肉の色と同じ色である。団子は獣の心臓を象徴したのであろう。生まの赤みはなく、調理されたため色は変化している。日本人の雑煮も、雑穀の段階があったのはもちろんである。そのあと赤米の時代があったであろう。白米の餅はいちばん新しい段階で、雑煮は正月の典雅な完成された料理となった。丸い形や四角い形は心臓や他の内臓を指したと思うが、初期の狩猟・採集民のごった煮が雑煮の起源であろう。赤いご飯や小豆飯も祖先獣の生き血をかけたご飯であった。中国の各種の歳時記が書き残しているように、歳末につくった小豆粥の赤い汁は、入口左右の門柱の根本にかけた。節日に子羊を供犠する文化を伝承する地域では、犠牲動物を剖いて血だらけになった掌を左右の門柱になすりつけ、敷居と門柱を血塗る。小豆粥の赤い汁は大昔の血液で、それは犠牲獣つまり祖先の血であった。これら入口の赤い血は魔除けの力をもっていた。E.S.モースは『日本その日その日』3（石川欣一訳、東洋文庫、1971年）の中で次のようにいっている。日本人は祝日には赤い色をしたご飯を供する。貧乏神は赤いご飯や黒い豆腐が嫌いなので、これらの食物を神棚や床の間に供える（128頁）。黒い豆腐とは焼き豆腐のことであろう。赤と炭の黒が魔除けになると信じられたのである。

天皇家では元旦、雑煮は召し上がらない。四方拝、歳旦祭の儀が終わると、午前8時、宮殿鳳凰の間で晴れの御膳が行われる。天皇の卓にはえび、乾しさばの平盛り、乾したらなどが盛り上げてある。天皇は箸をとり酒盃を口にされるが、実際には召し上がらない。晴れの御膳のあと、8時半ごろから両陛下は萩の間で朝食をとられる。本膳は皇室独特の菱^{ひしはなびら}と鯛の切り身ふた切れを重ねて盛った皿に浅漬の大根ふた切れを添えたもので、二の膳には小型の伊勢えびと砂糖煮の勝栗を添え、雉子酒とお祝いの菓子が加わる（伊達宗克「宮中の年中行事に七夕がないのはなぜ？他」『歴史読本』特別増刊新人物往来社、1984年、11月号）。皇室の元旦の本膳の前の晴れの御膳に2種類の乾し魚が調理されないまま出されることに注目したい。これらの膳は

始原の食物で、雑穀はおろか赤米や白米の痕跡もない。酒盃は置かれるが、天皇は酒を口にしない。酒も始原の乾し魚に見合った種類のものであろう。本膳も鯛の切り身と浅漬大根いずれも2つずつというのは古来の神饌の形式である。始原の食物である大根が顔を出している。乾し魚と生きた魚が食膳に出るが、アレクサンダー大王物語に出るヒズルの乾し魚と再生した魚と同じ形式のものである。

大晦日に天皇は節折^{よおり}の儀と呼ぶ禊ぎを行う。この儀式は宮殿竹の間で行う。天皇は侍従が差し出す荒世^{あらよ}の服で身体を撫で、侍従に返される。ついで、麻のついた櫛を差し出すが、これも同じように撫でて侍従に返される。そのあと、侍従は荒世の竹という篠竹を天皇の身体にあて、5回にわたって天皇の身長を計り、墨で印をつけ、そこから竹を折る。最後に差し出された荒世の壺に天皇が息を吹き込まれ荒世の儀が終わる。このあと大祓^{おおはらい}の儀が行われる。式のあと節折の儀で使われた品と共に祓い物は川に流す（伊達，上掲論文，245頁）。竹は天皇と等身大の他我で、5度同じように天皇の丈を計るのは、恐らく天皇の5つの靈魂を竹に移す儀式であろう。この竹は死と穢れを表わすので、折って川に流すのである。荒世の衣服は、紙^{ひとがた}の人形と同じもので、これで天皇の身体を撫で天皇の穢れを移す。これも流す。紙の人形の場合は、本人の名前を書き、息を吹きかけて川に流す。荒世の儀では天皇は壺の中に息を吹き込む。息は生きと同系の語で、天皇が壺に吹き込む息は、生ではなく死を象徴する息である。壺も川に流す。大祓のあと天皇は年越しそばを摂る。年越しそばは、庶民の間では江戸時代から食べるようになったというが、天皇家では庶民にならって食べると伊達という。そばを食べる時刻は午後5時以後であるので、旧暦でももう夕暮れである。それは新年の始まりのときである。現在の年越しそばは、NHKの紅白歌合戦が終わった午後12時ごろ食べる。今の新年がそのころから始まると考えられているからである。そば以前にも年の変わり目には別の始原の食物を摂っていたはずである。

年越しそばを始めとして、正月の食物である餅や糰^{しとぎ}は、穀物を粉にしたり搗いて原材料の形を留めない特徴がある。その背後にはどのような文化があ

始原への回帰

るのであろうか。現在、夏にはそうめんを食べるのが日常生活にとり入れられているが、古くはハレの日の食物ではなかったかと思われる。人見必大はその著『本朝食鑑』（1，島田勇雄訳注，東洋文庫，1976年）の穀部之一でうどんを論じたあと付録としてそうめんを論じている。いまだき（1697年刊），7月7日には必ずそうめんを食べることが上下ともに習慣になっており，家々ではそうめんを贈り物とする。あるいは七夕の供え物や乞巧奠の供え物とする。ことに備州の豊原と奥州の三春ではこれを献上品とする。食べる時，長らく煮て油と塩をとり去る。つけ汁は，うどん，ひやむぎの汁に同じい。あるいは洗淨し，水で煮て塩と油をとり除き，味噌汁や醤油汁で煮て食べることもある。これを俗に^{にゆうめん}入麩という。いずれも大根汁に合わせて食べると美味で毒を消す（69頁）。7月7日の七夕は1月7日の人日と対になった1年に2度行われる再生儀礼の日であった。1月7日から1月15日の小正月の1週間は，1月1日から6日までの死の儀礼のあとの再生のために日々であり，7月7日の七夕は，7月15日（現在は多くは月おくれの8月15日）の盂蘭盆で祖霊を迎える儀式を行う導入部であった。先祖にとっては，この世の子孫を訪れることが再生（よみがえり）となった。七夕で食べたそうめんは，年越しそばと同じもので，いわば始原の食物であった。神仏にそうめんを供えたが，そうめんは神そのものであった。節日にお供えを食べることは，神を食べることであった。そうめんは天子に献上した。天子はそうめんを食べることにより，その聖性を改新した。そうめんを大根汁といっしょに食べたところがあるが，始原の食物である大根といっしょに食べるという古い記憶があったようである。美味で毒消しということばでこれを表現している。七夕の行事としては，蔵王堂の蛙飛びの行事があることは前述した。

穀物があるものは脱穀し，粉にしないでそのまま食べるのが日常の食習慣である。ところが祭りなどに際して，これらの穀物を粉にして食べていたことが多くの事例を見た結果分かってきた。結論を先にいえば，麦などの穀物はそのままよりも粉にした方が食べ易いのであるが，その習慣が麦のあとに主食となった米のようなそのまま炊いて食べる穀物にも用いられた。これは

1種の始原回帰といえる。田植えは、稲がどのように成長するか、多くの未知の要素をはらんだ仕事で、神の意思にかかわる部分の多いものとされた。田植えの際に用いる食物は、たなはつあるいはたなはなといった。田植直前に、たねもみを余分に水に浸し、これを蒸すか煎るかして臼で搗き、地主をはじめ親族近隣に贈答した。これをたなはつと呼び、田植えの日に、麦を煎って粉にしたものをたなはなと称して、飯にふりかけて食べたものである。田植えどきの食事はふつうとちがい、変り飯を炊いたり朴ほおの木の葉に包んで食べた。東北地方では、たなはなは大抵煎り豆の粉で、これを稲の花と呼んだ。それは、その色が稲の花のように黄色であるためだった（中山太郎『萬葉集の民俗学的研究』パルトス社、1962年、118頁）。田植えの日はハレの日であるが、たなはつとかたなはなといった麦や豆を煎って粉にしたものが用いられた。主体の米飯にふりかけて食べたが、古くはこれらのふりかけが主食であって、米飯はあとから入ってきた文化度の高い食事であったと考えられる。もうひとつ、木の葉に変り飯を包んで食べたというが、この変り飯というのは、今日いう五目飯とか混ぜご飯に相当するものであるが、ハレの日の五目飯は薬飯に類するもので、松の実、くるみ、どんぐり、栗の実など、木の實を混ぜたご飯であった。それは始原の食物であった。

しとぎ（糰）は、もち米でなくうるち米の粉を1晩水に漬けてそれを蒸して餅につくったもので、神前に供える。鳥の子ともいい楕円形をしている。しとぎ餅はもち米でつくったいわゆる餅よりは古い形式を保っている。もち米の餅は円い形と四角い形のものがあるが、起源的には供犠された動物、つまり祖先獣の心臓その他の内臓を象徴したものであろう。しとぎ餅も動物の内臓あるいは鳥の子と呼ばれるように、鶏の卵を象徴したものであろう。当然のことであるが、しとぎは日本独自のものではなかった。中国清朝の19世紀前半の蘇州の歳時記である顧禄『清嘉録』（中村喬訳注、東洋文庫、1988年）にいう。上元の日（正月15日）、人びとは米粉を1夜水に浸けておいて粉丸だんごをつくる。これを円子という。また米粉に酵母を加え、餡を包んで、ちょうど饅頭のようなつくりにし、油で揚げる。これを油餠という。ともに住民が

神を祀り、祖先に供える節物である（48—49頁）。ここでいう円子はしとぎでつくった団子で、米粉に酵母を入れてつくったものは、解斎のときに食べる食物であった。これを食べることによって正月の再生行事は完了した。これはユダヤ教徒の食べるハレの日の種なしパンと解斎のときの発酵パンと同じものである。中国の回族が祭りのときに清真寺に集まり、ごま油で揚げた油香というパンを食べるが（日本放送出版協会・中国雲南人民出版社『雲南の少数民族』1990年、209頁）、同じものである。

米はうるちともちに大別されるが、始めから粉食する必要はなかった。しかし節物として用いられるときは始原の姿をとり、粉にされた。米以前からあったひえ、あわ、きびのようなイネ科の植物は粉にしないと食用にならなかった。きびの場合、うるちともちの区別はあるが、粉にしないと十分に味わえない。イネ科ではないが、タデ科に属するそばも粉食にする。イネ科の麦にはいくつかの種類があるが、粉にしたり押しつぶしたりして加工した方が食べ易い。これらの粉食になじむ穀物が米の前に渡来したことは疑いをいれない。節日に始原の食物を摂ったが、米が常食とされるようになると、粉食の原料に米が並行して用いられるようになったのである。臼は新石器時代の住居跡から出土するし、パンが同時につくられていたから粉食の始まりは古い。中近東を原産地とする小麦・大麦やそばが東漸し日本に到達したのは測り知れないくらい古いと思う。恐らくはアフリカ・中近東を原産地とする瓜類と共に、あるいはそれにつづいて日本海沿岸の集落にもたらされたであろう。さきに、そうめんが7月7日の七夕の食物であることを述べた。七夕は1月7日の人日の日の対の日である。さらにこの日は7月15日の盂蘭盆会の始まりの日で、祖霊がこの世の自分のかつての家に帰ってくる日である。七夕の祭りでは、牽牛、織女の年1回の交會が行われる。牽牛が祖霊で人間の織女の胎内に入るとも考えられ、人間牽牛が祖霊の織女の胎内に入るとも考えられる。この日は人間も祖霊も相互に交會してよみがえりを実修した。現在、ことに関西地方では、うどんは節日の食物というよりは、もっとも日常的なケの日の食物となった観があるが、古くはハレの日の食物であった

(四方田犬彦「白の由来」『is』86, ポーラ文化研究所, 2001年, 86—89頁。
三輪茂雄『白』法政大学出版局, 1978年。柳田国男『木綿以前の事』『定本
柳田国男集』第14巻, 56—77頁「餅と白と搗鉢」〈1934年〉)。

このように、粉にしなければ食用になり難かった穀物は、ウリ科の果実と共に植物性の始原の食物で、それを摂取する人びとにとっての穀霊であり神さまであった。同時に彼らは、死後は大地に埋葬され、黒い炭素の遺灰となり、そこから春になると新しい穀物や果樹として成長すると考えた。人間も植物や穀物と同じように、死と再生を繰り返すと考えたのである。火葬が普及するようになると、その再生観念はどのように変化したのであろうか。ただ人体そのものは腐敗を始め燃えつきても、体内に宿るいくつかの魂や体外に隠れている外魂は、人体が滅亡しても永遠に生きつづけ、新しく誕生する肉体に入ると考えられた。穀物や果物、ことに初物の中にはこの種の霊魂が新鮮な姿で入っていた。

前漢以前の古礼を集めた『礼記』(上, 竹内照夫訳, 明治書院, 1971年)によると、天子は孟春の月(2月初旬)、つまり旧正月、明堂の青陽殿の北室に起居し、青馬が引く青い馬車に乗り、青い旗を立てる。天子は青の衣服を着け青玉を佩^おび、主として麦飯と羊肉を食べる。食器類は素焼きで、直円筒形である(228—229頁)。明堂は天子の居堂で、亜字型をした中央に院子を設けたもので、現在では中国の一般的居宅となっている。亜字型は、殷墟の亜字型大墓に見られるように、中央部を当時の地下水位の位置まで掘り、そこに槨室を設け、帝王らの遺体を入れた木棺を中に収め、棺の下には(四つ目の)犬を殉葬した。亜字標識は氏族によって多少の相異があるが、人体の表象である。針灸師が用いる針灸のつぼを図示した人体図は昔から明堂図というが、亜室のことを明堂ともいった。この人体は祖霊の表象で、棺内の遺体にかぶさって、死者に霊力を与えあの世で再生させたのである。古礼では、天子は新年には青1色の中にあつた。青は現在も死体を濃紺の布で包む風習がある。以前は中国人は正式のセレモニーで紺のスーツを着用しなかつた。日本人が紺のスーツを着て中国人と商談するのは初めは奇異の感を与え

たであろう。現在の国際交渉の舞台では、中国人も欧米人の紺のスーツに身を包んでいる。天子が青1色の中にあるのは、死と再生の境界にいることを意味した。青馬は白馬のことで、正月7日人日に日本の宮廷で行われた^{あおうま}白馬の節会で用いられた葦毛の馬と同じものである。天子は青衣を着け再生を待った。祖先の皮でできた旗も青であった。天子の食器は素焼きの円筒形のもので、岡山県や広島県の古墳から出土する特殊器台を彷彿させる極めて非日常的なものである。16世紀の後半来日し、キリスト教を布教したポルトガルのイエズス会士 L.フロイスは、天皇の食器が極めて質素な土器で、使用後破棄され埋められたと述べている。天皇はいつも始原の食物を摂ったのである。中国では天子は正月に麦飯と羊肉を食べた。

中国では豚肉が広く用いられる。イスラム教徒は豚肉は食べないで、牛肉を食べる。羊は思ったほど食べない。その居住地は牛街 (OxStreet) と称し、牛肉店が立ち並ぶ。先に挙げた雲南省の昆明一帯にいるナシ族は、自分たちの祖先は蛙や羊であるといい、その象徴物を背中に背負っている。彼らは2月4日と10月10日に神さまである蛙を食べることは前述した。2000メートルから3000メートルの高地では羊の放牧はうまくゆかないらしい。遊牧を止めたので冬期の牧草にこと欠くのである。牛の放牧は目にした。高地ではヤクを目にした。羊肉は食べる習慣はないようである。麦もこの高地では十分成熟しない。彼らの常食はとうもろこしである。しかしとうもろこしは、ジャガイモと同じように中南米原産の穀物で、麦やあわのようなアジア原産の食物と較べるとずっと新しい。ナシ族はその祖先は羊を放牧し、麦を食べていたのが、中央アジアから雲南省の高地に逐われ、かつての主食を放棄せざるをえなくなったのであろう。その代わりに、蛙を食べる古い習慣は保持した。ナシ族は、毎年2月4日と10月10日（両者は現在は太陽暦の日付である）に蛙を食べる。これらの日付は前述したように、1年の重大な変わり目であった。このときに、祖先である神の血肉を摂って衰弱した人間は再生したのであった。前述したように北ヨーロッパには、5月1日のメーデーと11月1日の万聖節、11月2日の万霊節が古くからあった。5月1日は北ヨーロッパ

では若葉が出始めるときであり、11月1日は植物の枯死が完了するときである。この時期、死せるあらゆる聖人の靈魂の祭り、その翌日のあらゆる死者の靈魂の祭りがある。仏教のお盆にあたる日といえよう。11月1日の万聖節の前夜祭はハロウィーンである。10月31日のハロウィーンというのは、神聖な夜の意味で、ジャック・オ・ランタンとって、現在では子供がかぼちゃをくり抜いて仮面をつくり、祖先の容貌をした姿で騒ぐ。この日、山上では魔女の供宴が行われる。供宴ではがまがえるの肉が出る。魔女の食物であるがまがえるも悪魔であると類推するのはよくない。魔女は山の神のなれのはてで、がまがえるは人びとの祖先であろう。正月の前夜、祖先を食うことにより、あらゆる死せる聖人もその他の人びとも再生したのであった。日本では吉野の蔵王堂で盂蘭盆会の導入日である7月7日に蛙飛び行事が行われるが、同じ再生儀礼である。11月1日あるいは10月1日が年の始めであると昔から多くの文化で思われてきた。古ローマ暦は年末の月は10月であった。ラテン語セプテンベル（・メーンシス）、オクトベル、ノヴェンベル、デケムベルは7月、8月、9月、10月を指し、年初は3月であった。のちの暦の改革で年初を1月にもって行って調整したので、上記の月々は9月、10月、11月、12月を指すようになった。1年10か月暦は他の文化でも見られ、1か月を36日とし、年末に5日の閏を入れた。この暦は長つづきせず、各月が31/30日の暦に改新された。

宗懐『荆楚歳時記』（守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂、東洋文庫、1978年）にいう。10月1日にきびのスープをつくる。10月1日を秦の歳首という。きびのスープの意義は明らかでない。北人はこの日、ごまの雑炊、豆飯を用意する。天気は暖かく春のようなので小春という（220頁）。きびのスープや雑炊や豆飯は、10月1日という始原の日に撰った始原の食事であった。6世紀にすでにその意義が明らかでなかったようである。注によると、秦の10月1日歳首は115年間行われた。江夏の大祖黄祖の故事に、この日船上できびの雑炊を用意して多くの客をもてなしたとき、禰衡という者の言が不遜であったので祖がこれを責めたところ、衡が却って祖を罵ったので、祖は怒って

始原への回帰

衡を絞殺させた（221—22頁）。歳首は死と再生の境界であるので、その意義は忘れ去られていたが、人を供犠する習慣があったと考えられる。このような境界における供犠や殺害については別稿で論じたい。

Returning to the Primeval Times

Eiichi IMOTO

At the New Year Festival, for example, almost all a nation or an individual has realized the myth of each own origin and eaten the food, though very much refined, of ancestor animal, vegetables or mixed materials. This is a comparative study of rituals of the returning to the primeval times.